

研究紀要

くらしをひらく子ども

—— 個性豊かに自己表現する姿を求めて（2年次） ——

1996

島根大学教育学部附属小学校

— 序にかえて —

新学期より、朝8時から職員朝礼の始まる8時25分までの25分間が私にとっては、子どもの観察とコミュニケーションのための貴重な時間であり、日課となっています。

毎朝、校長室を出て、中庭に立って眺めると、すでにかかなりの数の子どもが、鉄棒・雲梯遊び、木登り、木製ジャングル・ジム遊び、にわたりの世話、平行棒遊びなどに興じています。あちらこちらから「先生、おはようございます」と元気に声をかけてくれる子どもたち。中庭のすみずみから楽しそうな子どもの声が聞こえてきます。

子どもたちは、早朝のさわやかな空気の漂う中庭で、手や身体を動かし、大きな声を出し、目を輝かせ、元気に活動を開始しています。新鮮な酸素を胸一杯に吸い込んで、子どもたちのパワーは全開です。早朝から、このような生き生きとした子どもの、元気はつらつとした姿が見られるのは、小学校としては誠にうれしい光景であります。子どもたちにとって、今日一日の活動の心身の準備運動として最高のひとときではないでしょうか。

ある朝、中庭へ出たら、数人の子どもたちが話しかけて来てくれました。「先生、いいもの見せてあげるから、いっしょに行こうよ」と、私を農園へ案内してくれました。「先生、トウモロコシの芽が出たんだよ」と言って、地表にわずかに出た小さな、小さな芽を見せてくれました。「先生、これが私の芽だよ」「私の芽は根もとの豆まで見えてるよ、だいじょうぶかな」「もっと水をやって、早く大きくしたいな」。子どもたちと、この自然現象を観察しながら会話がはずみます。この中庭から少し離れた所にある農園も、私にとっては子どもたちとの楽しいコミュニケーションの場です。

鉄棒でいっしょうけんめい逆上りの練習をしている子どもたち。雲梯に挑戦している子どもたち。そんながんばり屋の子どもたちに声援を送っていました。すると、にわとりを抱きかかえた子どもたちが、「先生、このにわたりの名前知っていますか」、「今、朝ごはんの草を与えているところなの」と話しかけてくれました。

また、3人の子どもが小さな小石を二つ両手に持って話しかけて来ました。「先生、この二つの小石を両手に持ってしっかり押しつけて持っていて」。最初は、この子どもたちが何をやろうとしているのか、理解し難いものがありました。

私が、この子どもたちの言うようにしていたら、その子は押しつけて持っている石の周りを、ぐるぐると手を回しながら10ほどかぞえてから、「先生、二つの押しつけていた小石を、ゆっくり離してみてもいいですよ」と言うのです。言われるまま、ゆっくり二つの小石を離そうとしたら、何やら磁石が引き合うよに、二つの石に離れにくい力が作用しているのです。子どもたちは私を驚かせてみたかったのでしょうか。「先生、不思議でしょう。どうしてかわかりますか」と魔法使いになったような気持ちで話しかけてくれるのです。

さらには、しゃがんで話している私の髪の毛の少なくなった頭をのぞき込んで、「先生の頭、どうして髪がないの、どうかしたの」と実に素朴に不思議そうに話しかけて来て、私の頭を気持ちよさそうになでてくれるのです。「実はね、先生はね、大変苦労をしてね……」と、つい冗談を言いながら、ユーモラスな会話となってしまいました。

校舎の近くにある中庭や農園は短時間を利用して、手軽に遊び、コミュニケーションをするにはとても都合の良い場所です。この中庭や農園で毎朝子どもたちが過ごしている、朝8時45分までの時間は、将来のある夢多い子どもたちが生きていくための、生活技術の基礎トレーニングが培われているように思われます。すなわち、手や身体を動かし、考える。友だちや先生と言葉と身体の動きでコミュニケーションをする。動物、植物を友として、育てはぐくみ、観察する。これらの子どもの営みが、早朝の中庭や農園の遊びの中に包含されているのではないのでしょうか。

このような手と身体を動かし、頭脳で考え、自己を表現することを、学習の場（授業）でも再現していくことが授業実践研究の大きな課題です。本校の今年度の研究テーマは「くらしをひらく子ども一人個性豊かに自己を表現する姿を求めて」です。

ここに、本校の一年間の研究成果を公表することとなりました。この大きな研究テーマの目標に向かって、さらに、一歩も二歩も前進させるために諸先生方ご意見、ご指導、ご助言をよろしくお願いいたします。

目 次

序にかえて	学校長 山下 晃 功	
I 暮らしをひらく子ども		1
II 教科における授業の構想と実践		
国語科 子どもが表現の価値を追求する国語科学習		7
— 言葉の自覚化を図る活動や支援のあり方をさぐる —		
社会科 子どもが自分との関わりで社会事象にせまっていく学習		24
算数科 子どもが数理を追求していく算数科学習		36
理科 子どもが自ら自然を深求していく理科学習		48
生活科 子どものくらしが広がる生活科の学習		60
— 思いや願いをもち、活動に没頭できる子どもの姿をもとめて —		
音楽科 子どもが感じたことを豊かに表現していく学習		72
— 一人ひとりの創造性を高めていくために —		
図工科 子どもが自分らしい表し方を求めていく学習		79
家庭科 子どもが自らのくらしをつくり出す学習		86
— くらしを見直し生活する工夫 —		
体育科 子どもが楽しさを追求する体育学習		93
特殊教育 子どもたちが楽しむ学校生活		105
— 一人ひとりとの対話に視点をあてて —		
保健科 子どものくらしと保健室		122
— ころやからだについて一人ひとりの思いが表出できるための環境と支援 —		
おわりに	副校長 佐 貫 泰 則	
研究同人		

I 総論

くらしをひらく子ども

—個性豊かに自己を表現する姿を求めて（2年次）—



千手院のおじぞうさま 3年 原田 恵里

II 教科における授業の構想と実践



力をこめて 4年 坂根寛治

個性豊かに自己を表現する姿を求めて

— おわりにかえて —

新しい学力観、新しい評価観に基づく教育が実施されて5年が経過しました。この新しい教育においては、子ども側に立ち、今まで以上に指導と評価の一体化を図ることが求められています。すなわち、子どもたち一人ひとりの豊かな自己実現を支援し、関心や意欲、思考や判断、表現などの能力の育成をめざすこと。その指導にあたっては、子どもたち一人ひとりのよさを見つけ、それを積極的に生かすとともに、様々な思考や判断、表現などのよさに共感し、子ども一人ひとりが学習の喜びや成就感を味わえるようにすることが重視されています。各学校でも、従来の子ども観なり教育観を変革しての取り組みがなされていることでありましょう。

本校では、これまで一貫して「子どもは生まれながらにして追求する存在であり、開かれた存在である」という子ども観を基本にして、子どもの内なる可能性を引き出し、主体的に考え行動する子どもの育成をめざし、学校生活の全領域を通して実践的研究を進めてきました。平成7年度は、主題「くらしをひろく子ども」のもと、副主題を「個性豊かに自己を表現する姿を求めて」（二年次）とし、授業において「一人ひとりの子どもたちが楽しく生き生きと学習に参加し、さらに、学習したことを一人ひとりが個性的に自己表現できる子どもに育てほしい」と願い、授業実践をふまえた研究を積み重ねてまいりました。

6年生「円柱の展開図」の導入時の授業でのことでした。円柱の模型や既習の角柱の展開図をヒントにしながら、「自分の円柱をつくろう」を課題として学習が進められました。一人ひとりの子どもは、自分なりの円柱をイメージし、意欲的に取りかかりました。円柱の側面部分が長すぎた子は、ぴったりと合うように余分な所を切り取っていました。ところが、組み立てた時、側面部分が短いと気づいた子は、とても困惑顔でした。ここで教師がどのような支援（評価）をするかが、真に子どもの主体的、創造的な学習になるかどうかの隘路になると考えます。ここでは、「〇〇君、よく頑張った。展開図の意味が分かっている。でも組み立ててみると……惜しいなあ。」「どうして短くなったのかな、どこに気をつければいいのか。」との助言がありました。すると「分かった、分かった、もう一度つくる。」とそれ以前にもまして生き生きと円柱づくりに取りかかりました。このような学習が展開できたのは、教師がこの学習のねらいや内容とともに子どもの実態を把握し、この学習を通してどんな子どもに育てたいのかについて確かな願いを持っていたからでしょう。また、一見して子どもの見方、考え方においてマイナス面と思われる中にもプラス面に着目する複眼を持っていたからだと思います。そして、正しい展開図をかくための適切な助言もなされています。このように教師の適切な言葉がけによって子どもは自分の課題が明確となり、意欲的に取り組み、成就感を味わうことができたのだと思います。

この授業を通して、教師の姿勢や対応のあり方などについて様々なことを学びました。その中のいくつかを取り上げてみます。

- 子どもと追求対象のことを常に念頭に置き、何をまかせるかの見通しをもつこと。
- 子どもの反応（言動）が、教師の意図とズレていたり、はみ出ているのを認めること。
- 教師の予想を越えた反応（言動）の中に、子どものよさや可能性の芽があるという考えに立つこと。
- 子どもの反応（言動）の背後に隠されている独自の見方や考え方を掘り起こす工夫をすること。

今回の研究協議会では、これまでの研究で明らかにしたことを授業を通して具体的に提案いたします。ご参加いただいた先生方と話し合う中で、ご意見、ご批評をいただき、本研究をさらに深めていきたいと願っております。

なお、この研究紀要は平成7昨年度の実践をまとめたものであることを申し添えておきたいと思っております。

研究同人

(平成7・8年度)

学校長	有馬毅一郎	山下晃功(平成8年度)
副校長	佐貫泰則	
教頭	瀧野一夫	岡田正樹(平成8年度)
研修部長	赤木直行	

国語	瀧哲朗	昌子佳広
	金山剛志	

社会	赤木直行	奥村忠孝
	吉崎朗	

算数	山崎敦史	原一夫
	立石浩	

理科	和泉浩行	高橋泰道
	原啓一朗	仙田みづえ

生活	赤木直行	中筋幸夫
	高橋泰道	瀧哲朗
	若槻尚美	奥村忠孝(平成8年度)
	陶山弘志(平成8年度)	

音楽	岡田正樹	中村治子
	山崎博美	高橋千晴(平成8年度)

図工	瀧野一夫	陶山弘志
	金築亨(平成8年度)	

家庭科	黒崎淑子	平井早苗(平成8年度)
-----	------	-------------

体育	中筋幸夫	酒井謙司
	若槻尚美	蔵敷真吾(平成8年度)

特殊	西島博	奈良井正
	天野千里	山本勉
	杵村明子	

保健	原田睦子
----	------

この研究紀要に収録されている授業記録は、次のような約束にもとづいて記載されています。

┌ 女兒を表す(男児はなし)

60 黒崎° 直列つなぎは、線が、1すじになっていて、並列つなぎが2すじになっている。

└ その時間の発言の通し番号を表す

平成8年6月13日 印刷

平成8年6月13日 発行

発行所 島根大学教育学部附属小学校
〒690 松江市大輪町416-4 (TEL 21-2471)

印刷所 松陽印刷所
松江市西川津町3566 (TEL 22-3418)
